

## かけがえのないあなた

先週、半田教会の朝礼拝に始めてきた名古屋学院の高校生は、第二礼拝室に棺が置かれているのを見て驚いたそうです。確かに、葬儀と銘打っていたわけではありませんので分からなくはありませんが、まずキリスト教には日本の神道のように、死を穢れと捉える考え方はありません。死を隠さなければならないという発想はないですね。また考えてみればキリスト教のシンボルマークである十字架はイエスに死をもたらした刑罰の道具ですし、キリスト教が成立したのは弟子たちが主イエスのよみがえり、死者の中からの復活を体験したからです。死はわたしたちの信じるキリスト教と切っても切り離せない。キリスト教は罪の赦しの十字架と死者の中からの復活を教えの中心に据える宗教です。この日曜日の朝に、わたしたちが集まるのも復活された主イエスにお目にかかるためです。そこで人類の最大の敵である死が敗北し、イエス・キリストが罪と死の支配を打ち破られた救い主であることを確認し、喜ぶ。キリストに結ばれて死んだ者たちはキリストに守られて眠りにつき、やがて復活をする希望を与えられている。わたしたちの礼拝はこの場だけで終わるのではなく、天においても神を崇め、賛美することは変わらないのです。生きているときも、死ぬときも、わたしたちのすることは神さまを賛美すること、この世においても、御国においても、変わることはない。ですから、席に座って御言葉を聞いて応答するわたしたちと、棺に横たえられている姉妹と、同じ空間に置かれていることは、神さまの側からみれば少しもおかしなことはありません。キリストの、わたしたちのための死を記念し、思い起こし、喜ぶわたしたちの礼拝は変わることはありません。キリスト教は死と向かい合う宗教であり、

復活を信じる宗教だからです。死はもはやすべての終わりではない、キリストによって眠りに変えられている。そのような希望をわたしたちは与えられています。もともとキリストは旧約聖書においては義の太陽と呼ばれ、その登場が心待ちにされていた存在です。すべてをあまねく照らす光ですね。これは今日、わたしたちに与えられている「あなたがたは世の光である。～あなたがたの光を人々の前に輝かしなさい。人々が、あなたがたの立派な振る舞いを見て、あなたがたの天の父をあがめるようになるためである」という箇所とつながります。

「あなたがたは世の光である」と、イエスさまはわたしたちに言われる。山の上にある町は隠れることが出来ない、ともし火をともして柵の下に置くものはいない。光は高いところにかかげられ、周囲を照らす存在となる。そしてそれは最終的に、あなたがたをそのように生かされる天の父なる神を、みなが崇めるようになるためだ、と続けられました。ここで言われている「光」、「あなたがたは世の光」と言われる時の「光」がいわゆる物理的な光ではないことは明らかですね。「光」がなくては生きていけないかけがえのなさを言い表しています。ここでは「世の・光」といわれるように、世に対する「光」として、人の世を照らす光としての役割が願われている。その存在、生き様が周囲に光と熱を与えるような、つまり導きの光となり、動力となるような存在であることが願われている。電気や炎の作り出す物理的な光だけでは、わたしたちの問題は解決しません。人間の作り出した光や、自然の光ではなく、神の言葉のうちにある光が、命が、わたしたちの在りようを明らかにし、導くものとなる。つまりわたしたちの心の闇、世の闇を照らす光となる。そして命への道を示してくださる。このような光が人生に、わたしたちに必要なのです。わたしたちを縛っている罪とわた

したちを恐れに閉じ込めている死の闇を明るみに出し、それを裁き、新しく生きる道をわたしたちに指し示す光の存在です。正しい方向へと、永遠の命の道へとわたしたちを導くそのような光の到来はなんと喜ばしいことか。キリストは旧約において義の太陽と呼ばれているという話をいたしました。この世界に義が欠けているということもわたしたちの悩みです。不義と不公正をただし、すべての者たちが祝福を受けて生きることが出来るようになる。救い主に期待されていたのは、その道筋を明らかにすることです。そして主イエスは、この人類全体の課題—罪と死を、みずからの命を十字架にささげて罪を贖い、さらに空の墓、すなわち復活によって死の問題を解決されました。そして、この神の判決を受け入れた者たちは、イエスの出来事をわたしのための出来事として受け入れ、洗礼を受けて、神の独り子イエスと結びつけられて生きる道に入った。わたしの救い主としてこの方のお言葉によって人格と人生と共同体を形作って生きる者となった。つまりキリスト者の名前で呼ばれる存在となったのです。ちなみに洗礼は初代教会では「照らし」ともいい、受洗者は「照らされた者」と呼ばれていました。これは今朝、わたしたちに与えられている御言葉を理解するうえでとても重要な部分です。つまりわたしたちは「世の光になれ」と言われているのではない、ということです。自家発電をするのではない。神の愛、主の赦しの愛によって照らされた者はすでに世の光なのだという神の側の真実の宣言になっている。

「(神に愛されている) あなたがたは世の光である」「神に結ばれているあなたがたは世の光とされている」という神さまの側の真実が伝えられているのです。わたしの努力によって光るのではなく、神の赦しの愛に感謝する応答の生き方が照らしとなり、導きとなる。「神はその独り子をお与えになったほどに世を

愛された。独り子を信じる者が一人も滅びずに永遠の命を得るためである」と言われ、事実そのようにキリスト・イエスは十字架の死に至るまでの愛をわたしに示して下さった。この神の変わることも取り去られることもない真実が、罪と死の闇に怯えるわたしたちを照らす光なのです。わたしの独り子の十字架の、血の贖いによって贖い取られたあなたは、わたしの目にかげがえのない存在とされている。だから、恐れず、神の赦しの愛に照らされた恵みを喜んで生きて欲しい。それが神の愛に生きることを知らない人々への証となり、導きの光となる。今朝の御言葉は、わたしたちをそのように照らすのです。聖霊の働きによって、この恵みの消息に生かされるならば、あなたは喜びと感謝をもって生きる燭台の上に置かれる光となる。イエス様はそのようにわたしたちに約束してくださったのです。愛されたから愛することの出来る者に変えられている。赦されたから赦しの愛を生きる者となることを願われている。照らされたから照らしを受けたものとして、「光の子として歩む」ことが勧められるのです。

最後に、二週続けてこのように照らしを受けて世を歩まれたわたしたちの信仰の姉妹の棺を安置して礼拝を守ることになるとは思っても寄りませんでした。このような得難い機会を与えられましたので棺の向きについて話をして御言葉の取り次ぎを終えたいと思います。日本の家屋は基本、南側、日当たりのよい方に向かって家を建てますが、ヨーロッパにある歴史の古い教会堂はみな東向きに立てられています。つまり太陽の昇る方角に礼拝堂が向いている。日曜の朝、一番の日が昇るとそこから照らされる光がまっすぐステンドグラスを通して祭壇にふりそそぐ。義の太陽、わたしたちを照らす復活の光、その光を迎えるように教会を東の方角に向けて建築するよう整えることを

オリエンテーションと呼びます。東を意味する「オリエンズ」から来た教会用語です。また亡くなった方の棺を上ってくる太陽を迎えるように置くこともオリエンテーションと呼ぶのです。いまではオリエンテーションという言葉は当たり前に使われる言葉になりましたが、もともとは教会用語です。光が一番に射す正しい方向＝東に、会堂や棺を向けるように整えることを意味していました。そこから、物事を正しい方向に向けるという意味に使われるようになりました。いま松下暁子姉妹の棺は、みなさんと同じように講壇に向かって相対する向きに整えられています。これは御言葉に応答するわたしたちの姿勢をあらわします。「御言葉が打ち開かれれば光を放ち、無知なものにも諭しを与えます」と詩篇に歌われますように、御言葉の中にある光がわたしたちを照らす。わたしの生きる向きが主イエスによって照らされる。赦しの光のもとで、わたしの歩みを点検し、悔い改めの喜びと感謝をもって主とともに生きる者となることがゆるされている。それこそがわたしたちの礼拝の喜びです。わたしたちにとって、人生を正しい方角に導くオリエンテーションは礼拝以外にはない。今日は、このあと葬儀のために棺を、この講壇に移動しますが、そうすると今度は東の方に棺が向くことになります。「眠りにについている者、起きよ。死者の中から立ち上がれ。そうすれば、キリストはあなたを照らされる」とイースターの時に朗読される約束の言葉に従えるよう整えます。このことから生きているときも、死んでからのちも、義の太陽である主イエス・キリストこそがわたしたちの喜び。そして語られる命の言葉、罪の赦しと復活の希望の福音が、わたしたちの生きる力の源であることを確信いたします。

お祈りいたします。